

ボランティア活動の意味と有用性

—命を捨ててまで外国人を助けるのは偽善か?—

The meanings and effectiveness of volunteer activities

饗場 和彦

1. はじめに

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、未曾有の被害が出た。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件が、その後「9・11」の略称でもって歴史の大きな転換点を表象してきたのと同様、「3・11」も原子力発電所事故を含む歴史的な天災・人災として年表に刻まれるであろう。同時多発テロからちょうど10年という区切りの良さ、「9・11」「3・11」という語路の近さという偶然性がシンボリックな印象論も増幅させる。

印象論としての衝撃もさることながら、実体論としても「3・11」を通して特徴的な社会的事象が様々に現出した。その一つが市民のボランティア活動である。日本におけるボランティア活動は「ボランティア元年」と言われる1995年の阪神・淡路大震災を契機に活発化し、その後、1998年の特定非営利活動促進法（通称・NPO法）の制定をはじめ制度化も進展、「新しい公共」という概念に象徴される¹、市民社会における公共性概念の脱構築も進む中、ボランティア活動は重要度を増してきた。こうした流れの中で起きた「3・11」は必然的にボランティア活動をめぐって明暗分かれる有形、無形の成果あるいは教訓・課題を提起した。「阪神淡路の時の反省から生まれた体制、対応がある程度、今回の東日本大震災の支援活動に生かされたが、まだまだ改善すべき多くの教訓が残されている」というのが支援活動にかかわった専門家に共通する総論であろう²。

筆者は「9・11」の際はその日、出張でニューヨークに居合わせ、「3・11」の際は3週間後に調査のため現場に入った。また、国外の紛争地も調査や支援活動でたびたび足を踏み入れてきた。いずれも現場の体験を通して多様かつ貴重な知見、感懐を獲得するのだが、その中で基本的な問題提起として表出される論点の一つが、ボランティアによる支援活動の動機・目的、効用の問題である。ニューヨークのグラウンド・ゼロで、東北の被災地で、また世界各地の国際協力の現場で多くのボランティアが活発な支援活動を展開する。なぜあれだけ多くの人々が、あのように熱心にボランティア活動をするのであろうか。その人々の動機や目的はなんなのか、なんの効用があるのか。本稿の前半ではこうした問題提起に対して概念的、実態的考察を行う。

その上で後半では、ボランティア活動の意味と有用性にに基づき、国際協力の分野におけるボランティア活動を考察する。具体的には国際協力のボランティア活動に対して向けられる否定的な3種の問いかけについて検討する。一つ目の問いは「国際協力のボランティア活動は偽善でないのか」、二つ目の問いは「困っている日本人も多いのに、なぜ外国人を助けるのか」、三つ目の問いは「なぜ命を捨ててまで、国際協力のボランティア活動をするのか」である。本稿の副題「命を捨ててまで外国人を助けるのは偽善か?」という問題提起はこの3種の問いを合成したものである。

2. ボランティア活動の定義

ここではボランティア活動を行なう人をボランティアと呼び、ボランティアとボランティア活動を区別して表現する。ボランティア活動とは、広い意味で「奉仕活動」全般を指すような捉え方がなされるが、概念自体には多様な要素が包含され、また時代・状況・地域によっても捉え方に相違や変遷がある。英語のvolunteerには、「志願兵、篤志家、自発的な」といった意味がある。キリスト教世界においては歴史

¹ 鳩山由紀夫元首相も促進した理念。2009年10月の所信表明演説では「人を支える、人の役に立つ、それ自体がよるこび、生きがい。こうした人々の力を私たちは新しい公共と呼ぶ」と述べ、「お上」が施す古い公共からの脱却を志向した。

² 茂木秀樹・宮城復興支援センター長の『災害ボランティアフォーラム in とくしま (2011年7月31日、徳島大学で開催)』における発言。同センターでは阪神・淡路大震災や東日本大震災のケーススタディをもとに民間災害対策マニュアルの作成をすすめ、バックアップセンターや防災倉庫の設立、災害ボランティアコーディネーター育成などの提案を行なっている。

的に、ボランティア活動は宗教的なチャリティ(慈愛、慈悲、慈善)として、またその延長線上で道德律として捉えられてきた。日本では元来、地縁型相互扶助の伝統があり、仏教を背景にした宗教的慈善活動もあったが、従来までは一部の裕福な篤志家による「施し」的な奉仕活動というイメージも強かった。しかし近年は、さまざまな向社会的(prosocial)な取り組みを広くボランティア活動として捉える傾向がある。

ボランティア活動の基本要素については一定の共通理解がある。そこで指摘されるのは、主に自発性、無償性、公益性、利他性、連帯性などである。「〈自発性〉・〈無償性〉・〈公益性〉という三つの条件…がそろっていれば、それはボランティア活動である」とされ³、あるいは「ボランティアとは、自発的に、無償で、…利他的に働く人たちを支える価値観であり理念」⁴、または「営利目的でない(無償性)、自発的に行なわれた(自発性)、他者へのかかわりを強める(連帯性)活動と定義される」⁵。

こうした捉え方の中で共通して抽出される要素は、「自発性」である。英語の volunteer の原義は、市民が自ら武器を持って立ち上がった志願兵にあるよう、この自発性という要素がボランティア活動を構成する基本要素である点は自明であり、確かに自発的でない行為はボランティアとはみなされにくい。ただ、自発性の概念自体にはその対概念である強制性との関係であいまいな境界を含んでいる。一般に外部から強制されて行なう行為は自発的な行為とみなされないが、その行為主体が消極的にせよ、最終的に自分の自由意志としてその行為を選択する場合、そこにはある種の自発性が存在する、とも考えられる。たとえば高校の生徒が授業の一環として行われる河川清掃に参加する場合、その生徒らの自発性の存否は一概に結論付けにくい。

「無償性」の要素もボランティア活動の概念構成においては重要であるが、無償性という要素自体の妥当性と、他の要素との同質性という点において議論の余地を残す。後述するように、ボランティア活動には「双方向性」「互助性」「Win-Winの関係性」「互酬性」があり、つまりボランティア活動には有形、無形の多種の報酬があり、その意味である種の「有償性」が存

在している。したがって、単純に一方的な自己犠牲として「無償性」をボランティア活動の必要条件にするのは、その妥当性自体に難が生じる。ただ、無償性を経済的・金銭的な利得を得ないという意味で限定的に捉えれば、その意味での整合性は確保できる。また、無償性というのは、要は自らの利得を前提にしない、つまり利己的ではないのだから「利他性」のある行為であり、私益を図るのではないから「公益性」のある行為であり、結局、無償性、利他性、公益性はいずれも本質的に共通する要素を指しているとも理解できる。このように同質性がある中でも、それぞれ微妙な語意の独自性、相違があるので取捨でどの用語を採用するかについては、議論は必ずしも一致しない。

ボランティア活動の基本要素に「連帯性」が挙げられる場合もあるが、およそボランティア活動には必ず行為の対象としての人間が存在するのであるから、少なくとも二人以上の人間の関係性において必然的に連帯性が生じる。したがって連帯性がないボランティア活動は存在しない、と考える以上、この要素を取ってボランティア活動の基本要素に挙げる必要性は乏しい。

「公益性」は私益を目的としないという意味では利他的であり、無償性を有する意味も含むが、公益を「公共の利益」とする場合、その概念をめぐって多様な解釈が成立する⁶。まず公益を提供する主体は誰なのか。公益を行政サービスと連想するイメージでは、その提供主体は政府になるが、ボランティアやNPO・NGOが近年、増加し重要視されているのは民間レベルにおける公益の担い手・提供者として存在するからであろう。公共という用語も、その指すものが人類全般なのか、あるいは社会の不特定多数の集団(たとえば日本国民)なのか、あるいはある種の共通性のある特定集団(たとえば高齢者)なのか、さらにはく全体一個という抽象的な関係性の中における全体という意味での集団なのか、など捉え方は分かれる。また利益の内容についても、普遍的な社会の諸価値の実現なのか、個別的な功利的な効用の増進なのか、あるいはそもそもその内実を否定し公共の利益とは「神話」であるがゆえ、政治家の方便に過ぎないという主張もありうる。

このように概観すると、ボランティア活動の基本的な概念要素—ここでは自発性、無償性、公益性、利他性、連帯性に着目—を単純に列挙しても、それでもってボランティア活動の意味が合理的に概念化されるには限らない。以下ではとくに動機の観点から、ボラン

³ 入江幸男「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社、1999年、4頁。

⁴ 田尾雅夫「ボランティア活動の定義」川口清史・田尾雅夫・新川達郎編『よくわかるNPO・ボランティア』ミネルヴァ書房、2005年、6頁。

⁵ 大嶺和歌子「ボランティア活動の動機と成果」西川正行編『援助とサポートの社会心理学』北大路書房、2000年、83頁。

⁶ 足立幸男『政策と価値—現代の政治哲学』ミネルヴァ書房、1991年、16～40頁。

ティア活動の意味を概念的に分析する。

3. ボランティア活動の動機

「なぜ、人はボランティア活動を行うのか」という動機についても様々な要素があるが、一つの分析の大枠としての分類は、①利他主義的要素、②利己主義的要素であり、実際にはこの両者が混在してボランティア活動の動機が形成されると考えられる。

震災ボランティア活動の従事者にその動機を問うたところ、「被災者の役に立ちたかったから」「被災しなかった者の義務だと思った」などの利他的動機は65.2%を占め、「自分自身の勉強になると思った」という利己的動機は11.6%だったという⁷。また、大学生にこれまで取り組んだボランティア活動について、その動機を聞くと、「自分の役に立つ」「友人や知り合いが増やせそうだった」「就職などで有利になるようにしたい」といった利己的動機が32.1%と高く、「社会や人のために役立ちたかった」などの利他的動機は15.4%だったという⁸。つまり、震災の場合、利他的動機でボランティア活動に携わる人が多く、逆に大学生が一般にボランティア活動を行うのは利己的動機が大きいという統計である。ボランティア活動の主体や客体の種類によって、利己的動機、利他的動機の割合は変化するであろうが、いずれにしても何らかの割合で混合していると把握できるであろう。以下、利他主義的観点、利己主義的観点、混合的観点からそれぞれ論考する。

利他主義 (altruism)、利他的行動 (altruistic behavior) あるいは他者志向的 (other-oriented) な活動は⁹、他者のことを考えて他者の利益を図る姿勢や行為をいう。道端に倒れて苦しんでいる人がいれば、普通、関心を向け、声をかけるなり手を貸すなりの行動をとる場合が多かろう。そこではその援助者には労力と時間、あるいは金銭の負担という自己犠牲が生じている。そうした自己犠牲をいとわぬ行動を取らせる根源的要因はなんだろうか。一つには哲学的に人間の生得的な本性としての善性から、あるいは動物行動学的に種の保存本能としての行為から説明されたり、他方、宗教的な使命感・信念、それに基づく「共生」の意識¹⁰、道徳的義務感という後天的な要素でも説明される。

ただ、「他者のことを考える」だけでなく、実際に

「他者のための行動を取る」か否かという点では、その場の状況・環境という外部要因も大きく左右すると指摘される。ラタネとダーリーはある殺人事件をきっかけに利他的行動を分析し、「傍観者効果」などの現象を提起した¹¹。キティ・ジェノヴィーズ事件は1964年にニューヨークで起き、全米に大きな衝撃を与えた。午前3時、仕事から帰宅したキティを変質者が襲い、そのアパートの住民38人が悲鳴を聞き、窓から顔を出したが、誰も助けに駆けつけず、殺害する30分の間に警察への通報もされなかった。

こうした殺人事件のような緊急事態に対して多くの人が事態に介入しないような状況は「傍観者効果」が働いているからであり、その要因は3種あるという¹²。一つは「責任の分散」であり、これはその場に多くの人が存在すればするほど、介入しなければならない責任は分散され、個々人の責任は希薄になるので、「自分でなくても誰か他の人が助けるだろう」と傍観する心理である。「聴衆抑制」は多くの人がいる場で介入して失敗すれば恥をかくという懸念から傍観する心理、「多数の無知」は多くの人が介入しないという状況から事態は介入を必要とされていないと一方的に解釈して傍観する心理をいう。こうした発想をすることで、命を落とす危機にいる人さえ助けないという、きわめて反・利他的な行動を人間はとりうると説明される。

こうした考察は人間の外部環境からアプローチするのであるが、再び、人間の内面的要素から考えれば、人間は本性的に利他的なる質を持つと主張されると同時に、本性的に反・利他的、利己的な存在であるという見方もある。

政治思想におけるトマス・ホッブズの人間観とジャン・ジャック・ルソーの人間観は、人間の本性を捉える上で対照的な論理を展開する。ホッブズは自然状態における人間は万人の万人に対する闘争になるゆえ強大な統治権力としてリヴァイヤサンを前提にして、はじめて秩序ある社会を想定できるとするが、そこでの人間のありようはむき出しの生存本能に基づく利己的存在である。他方、ルソーはむしろ逆に自然状態の人間は無垢であり憐れみの情を持ち平等な生活をしてきたと、利他的な人間像を描く。ただ、農業と鉄の生産によって私有財産が生まれ産業社会の中で貧富の差が生じるとともに、人は利己的な闘争に走ると

⁷ 柴田和子、大東真生、大山治彦、古川秀夫「ボランティア活動の動機における自発性と外発性」『国際社会文化研究紀要』6号、2004年、127頁。

⁸ 同上、125～126頁。

⁹ 「利他主義」、「利他的」は、「愛他主義」、「愛他的」とも表現される。

¹⁰ 湊道子「ボランティア精神と宗教思想」『実践女子短期大学紀要』32号、2011年、42～43頁。

¹¹ Bibb Latané and John M. Darley, *The Unresponsive Bystander—Why Doesn't He Help?*, New York, Appleton-Century Crofts, 1970.

ラタネ、ダーリー (竹村研一、杉崎和子訳) 『冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学』ブレーン出版、1997年。

¹² 桜井政成「利他的行動」川口・田尾・新川前掲書、51頁。

する。こう考えると、人間が元来、利己的であるにせよ、産業社会の成立とともに利己的な特性を得たにせよ、ボランティア活動はいずれにしても基本的に利己的な人間の傾向に逆らう行動ともみなされる。

こうした利己主義 (egoism)、利己的行動 (egoistic behavior)、あるいは自己志向的 (self-oriented) な活動としてボランティア活動を捉える視点は、一般的なボランティア活動のイメージとは乖離するため、一種の盲点としての重要度がある。

利己的動機の基本はコスト・ベネフィットの比較による合理的な意思決定過程に依拠する発想であり、数種類のパターンがあるとされる¹³。

一般的交換理論とされる考え方では、ボランティア活動は「ギブ アンド テーク」であり、自分が資源を提供する相手と自分に資源を提供してくれる相手が一致はしないが、将来的に間接的に何らかの形で自分にベネフィットがあるとする。ODAが日本の国益の観点から有用であるとする発想は、ODAの提供によって安定的な国際社会が確保される結果、それは日本の利益に資するという理屈であるが、これは一般的交換理論と同様の発想であろう。

投資理論による考え方では、ボランティア活動は自分への投資であり、現在は自分の資源を投入しても将来的にそれがコストを相殺、凌駕する形で自らにベネフィットが還元されるとする。将来、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) で働きたいから難民支援の NGO でボランティア活動をしているというケースは、投資理論に該当しよう。

また、ボランティア活動をレジャーの一種として捉え、自己の満足を得るための消費行動とみるレジャー理論がある。ボランティア活動をすること自体が単に愉快であるという面もあるが、自己の能力を発揮できる楽しさ、知見や技術を得られる楽しさなど単純なレクリエーションではない面も含めて「シリアスレジャー」という言い方もされる。アフリカン・フェスタなどの行事でアフリカの物産をフェアトレード商品として買ったり、チャリティコンサートでアフリカの民俗音楽を聴くという場合、単純な消費行動としての楽しさがある。

日本において従来、「情けは人のためならず」と表現される考え方は、「情けを人にかけて、まわりまわって結局、自分のためになる」とする利己的な発想

である。ボランティア活動において、その行為主体に対して、その行為の結果、金銭のやり取りではない何らかの恩恵が生じる、つまり客体としての被援助者に対して一義的に行為の恩恵が生じるほかに、主体にも二義的に恩恵が生じるという「双方向性」「互助性」「Win-Winの関係性」「互酬性」については、多くの研究で指摘されている。したがって、ボランティア活動の行為主体がこの恩恵・報酬を目的に行動するのは合理的な必然性がある。

ただ、上述した統計の例でも示しているように、実際、ボランティアの動機は複数に及び、基本的には利他的、利己的な両面の動機によって行為がなされると理解される。この動機の混在性は、一つには動機の機能という観点から説明されうる。クラリーやシュナイダーなどが提起したVFI (Volunteer Functions Inventory) モデルはボランティア活動という態度における心理的動機を6種—①価値機能 (values)、②知識機能 (understanding)、③社会適応機能 (social)、④経歴機能 (career)、⑤防衛機能 (protective)、⑥強化機能 (enhancement) —の分類によって整理している¹⁴。

< 価値機能 >

ボランティア活動をすることで、自分の価値観、信念、主義などを表出できるという機能。「私は自分より不幸な人たちを気にかける」「私は他者を助けることが重要であると考える」「私にとって重要な主義なので活動する」といった項目が該当する。端的に象徴的に表現すれば「ボランティア活動は信念だ」という言い方ができよう。

< 知識機能 >

ボランティア活動をすることで、新しい知識や技術、体験などを獲得できるという機能。「ボランティア活動をすることで、私に新しい展望が開ける」「ボランティア活動の経験は直接的な学びになる」「ボランティア活動をすることで人への接し方を学べる」といった項目が該当する。端的に象徴的に表現すれば「ボランティア活動は社会勉強だ」という言い方ができよう。

< 社会適応機能 >

ボランティア活動をすることで、他者と意思疎通が図られ、友人が増え、他者から好意を抱かれる。そう

¹³ 桜井政成『ボランティアマネジメント—自発的行為の組織化戦略—』ミネルヴァ書房、2007年、26～27頁。

¹⁴ E. G. Clary, M. Snyder, R. D. Ridge, J. Copeland, A. A. Stukas, J. Haugen, and P. Miene, "Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach", *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 大嶺前掲論文、87頁。

した「つきあい」としての機能がある。「私のまわりの人々は私のボランティア活動を望んでいる」「私の友人がボランティア活動をしている」といった項目が該当する。端的に象徴的に表現すれば「ボランティア活動はつきあいだ」という言い方ができよう。

＜経歴機能＞

ボランティア活動に参加することで自分の経歴にプラスになり職業の幅が広がるという、「キャリア」上の機能がある。「ボランティア活動をするのが希望したい仕事の足がかりになる」「ボランティア活動は自分の仕事とは異なるタイプの仕事を探求させてくれる」といった項目が該当する。端的に象徴的に表現すれば「ボランティア活動はキャリア開発だ」という言い方ができよう。

＜防衛機能＞

ボランティア活動に参加することで否定的、不利な状況においても自己を防衛できるという機能。「ボランティア活動をするといやな気分や孤独感を忘れる」「ボランティア活動をすると、他者より幸運である罪悪感が薄まる」といった項目が該当する。端的に象徴的に表現すれば「ボランティア活動は逃避だ」という言い方ができよう。

＜強化機能＞

ボランティア活動に参加することで、自己の内的意識が肯定的に有利に変化、強化される機能。「ボランティア活動することで、私の自尊心が高まる」「ボランティア活動することで、私が必要とされている実感を持てる」といった項目が該当する。端的に象徴的に表現すれば「ボランティア活動は自己肯定だ」という言い方ができよう。

このような機能の分類を見た場合、価値機能は明らかに利他的な動機として整理される一方、知識機能や経歴機能、防衛機能、強化機能は利己的な動機としての性質がある。

こうした機能分類について、桜井は別の観点から整理して7種の因子からなる動機の構造を提起している¹⁵。

＜「自分探し」動機＞は、今の「さみしいから」「自信がないから」といったネガティブな状況から抜け出し、自己のアイデンティティや針路、成長を求めたいと、ポジティブな志向も含んだ動機。

＜「利他心」動機＞は、「よりよい社会を作り出すから」「自分の恵まれている立場の恩返しだから」など利他主義的な動機。

＜「理念の実現」動機＞は、「世の中の問題を見て見ぬふりはできないから」「社会の不正を変えよう機会だから」など、自己の想定する理念を具体化しようとしてボランティア活動を行う場合。

＜「自己成長と技術習得・発揮」動機＞は、「仕事や将来役に立つ技術や知識を身につけたかったから」「社会勉強になる経験だから」などの動機。

＜「レクリエーション」動機＞は、「日常にないおもしろい経験だから」「新たな友達づくりになるから」など活動自体を楽しみたいという動機。

＜「社会適応」動機＞は、「以前から組織やスタッフらと関係があったから」「誘われたから」など他律的に活動に参加する動機。

＜「テーマや対象への共感」動機＞は、「同じような境遇だったから」と、その活動のテーマ、対象に対してとくに身近な共感を覚えるゆえ、という動機。

また年齢層別に分析すると、若年層（30歳未満）では「自分探し」動機、「自己成長と技術習得・発揮」動機、「レクリエーション」動機といった利己的な要素が強く出、高年齢層（60歳以上）では「利他心」動機、「理念の実現」動機、「社会適応」動機が強く見られたという¹⁶。

このように動機を個別に分離して、それぞれ利他性、利己性という特性ごとにある種の評価ができるとしても、実際の行動における動機形成は渾然一体とした分離不可能な、ホリスティック (holistic) な本質があるとも指摘される。たとえば近年「共生」という用語が頻出するが、似た用語で「共存」がある。共生は純粋に他者を生かす利他的な理念を根底に置くとされる一方、共存は微妙である。共存の概念では、動物や植物が自分を生かすには周囲の環境を生かさねばならないと考えるのだが、そこでは利他的な行動が同時に利己的な行動であるという分離し難い状況になる。

4. 国際協力ボランティアに問うーその1:「偽善でないのか」

本稿の前半では、ボランティア活動全般について、その意味と効用を定義と動機という観点から検討し、基本的な諸点を概括した。後半ではそうした点を踏ま

¹⁵ 桜井前掲書、34～36頁。

¹⁶ 同上、36～37頁。

えうえで、国際協力の分野におけるボランティア活動に焦点を絞り、具体例を交えて考察する。

国際協力のボランティア活動に対してたびたび否定的な問いかけがなされる。

たとえば、以下のような論評がある：「外国でNGO活動をするのがカッコ良いという風潮があるのもいかなものか。わが国は国内で困っている人が多い。国内に目を向けずに途上国に行き英雄気取りで帰国して報告会などやる人がいるが、この節度のなさもひどい」¹⁷。ここで指摘されている一つの論点は、「国際協力のボランティア活動は偽善でないのか」という批判である。森本のこの指摘は、2004年4月に起きたイラクにおける日本人質事件を背景にしている。イラクのストリートチルドレンへの支援や劣化ウラン弾の調査、イラク戦争の戦災の取材という目的でイラク入りした日本人の若者3人が現地の武装勢力に拉致され、命と引き換えに自衛隊のイラク撤退を要求されたものの、最終的には無事に解放された事件。日本ではこの3人に対する「自己責任論」に基づくバッシングが噴出し、日本政府、メディア、国民の大勢がこの3人の行動を批判的に捉えた。このバッシングの根底にある一要因が、そもそもイラクの人を救おうとする行動自体が偽善でないかという懐疑なのである。

ボランティア活動に対する偽善性の指摘は、国際協力の分野に限らず、広く援助の行動一般に対して向けられうる。ボランティア活動の文脈で指摘される偽善性とは、一義的、表面的には人助けとしての自己犠牲の外形を示しつつも、その内実は虚栄的な自己満足に過ぎないという点であり、したがって、その行動は「偽り」とであると批判するのである。

前半で概論したボランティア活動の動機を鑑みると、この偽善論に対しては肯定も否定もありうる。

偽善論は要は、ボランティア活動は利己的なものなのに、それを利他的とする点で偽りがあると言うのであるが、それは是認されうる。ボランティア活動の動機について個別には多様な要素があるものの、利他的性質と利己的性質に分ける分類は一つの合理的な分析手法であり、確かに利己的な動機からボランティア活動を行う実態は統計からも実証されていた。つまりボランティア活動は利己性があるという点において偽善論と論拠を共有するのであるが、他方、偽善論に反駁する論点は利他的動機が存在である。利己的な動

機と同時に利他的な動機も混在する実態に即して、クラリーやシュナイダー、桜井らの研究は「利他心」動機を挙げるのであり、したがってボランティア活動の淵源に純粋な他者志向的愛他精神が存するのは一割合の差こそあれ一否定できないであろう。その意味で、ボランティア活動は偽善ではないとも反論できよう。

5. 国際協力ボランティアに問う—その2：「なぜ同じ日本人を助けず外国人を助けるのか」

国際協力の分野でボランティア活動をする人々に向けられる疑問で、頻度の高いのがこの援助対象としての日本人と外国人をめぐる優先度の問題である。前述の森本が、「わが国は国内で困っている人が多い。国内に目を向けずに途上国に行くのはおかしいと主張するように、見ず知らずの外国人よりまず同胞の日本人を優先して支援すべきでないか、という反問は、国際協力の分野のボランティア活動において特徴的に見られる批判の一種である。

これに対してどのような反論がありうるだろうか。一つは「論理のすり替え」的な対応がある。カンボジアの貧困層や不遇な女性らを対象に教育、医療、職業訓練などの支援を行っている日本の国際協力NGO「セカンドハンド」は、市民から「なぜカンボジアの支援なのか。日本の過疎地ではお年寄りが大変苦勞しているのに」といった問いが向けられると、「では、それに気付いているあなたがまず支援をすれば」と切り返すようにしているという¹⁸。多くの場合、「いや、私は忙しいから…」などと曖昧な態度しか返ってこないそうで、ためにする批判者を退けるには効果的な対応らしい。ただ、論理的にはこの対応は、問題のすり替えであり、「なぜなのか」という問いに対して答えではない。

論理的な反論としては一つには、自己矛盾論がある。先述の偽善論とあわせて、「外国人でなく日本人を優先すべき」というこの優先論で国際協力のボランティアを批判する主張に対しては、その論理矛盾を指摘することで反駁しうる。偽善論の本旨はそもそも国際協力の活動は利己的であり、他者を助けるものではないという主張であるから、そうであるなら、日本人であろうが外国人であろうが、そもそも助けるという行為自体が存在しないのであるから、どちらを優先し

¹⁷ 森本敏「日本人の節度喪失した人質事件」『産経新聞』（2004年4月17日・朝刊）

¹⁸ 「セカンドハンド」は香川県高松市に本部を置く公益社団法人。1994年に発足し、不用品を市民から集めてそれをチャリティショップで販売、売り上げをカンボジアの支援活動にあてる。

て助けるのかという問題設定がはじめから矛盾している。

偽善論とは切り離して優先論のみで、「ボランティア活動は利他的、他者志向であるが、その他者はなぜ日本人でなく、外国人なのか」とする問いには、巡り合わせ論、想像の共同体論などで反論できよう。

巡り合わせ論では、「なぜカンボジア人なのか、それはたまたま目の前の困っている人がカンボジア人だったから」と答える。したがって支援の対象は偶然、外国人であっただけであり、それは日本人であってもよく、よってそこには日本人・外国人の選択、優先に関して積極的な論理的根拠はない。ボランティアの活動能力はおのずと限界がある以上、世界中の困窮者全てを支援できるわけではない。結果的に支援対象は選択的にならざるを得ず、その選択の経緯は偶然であったというのである。だが、余力があれば、支援は他の対象にも拡大可能であり、その場合、外国人でなく日本人を支援する余地が生じるし、もしその余裕がないのであれば当初、偶然によって選択した外国人という対象に特化して支援を行うほうが効率的、合理的であろう、資源は限られているのであるから。実際、多くの国際協力NGOは東日本大震災に対しても積極的な支援を展開しており、普段の国外への支援活動を多少シフトして、あるいはプラスアルファの形で対応を行っている。前述のセカンドハンドも地震発生直後から多様な震災支援の活動を展開している。

このように国際協力のボランティア活動においては支援対象として積極的に日本人・外国人を選択しているわけではないのであるが、この点から「日本人・外国人という区別を前提にする優先論に対して、別の反論が可能である。

想像の共同体論では、この日本人・外国人という区別を前提にする発想に対して、その非合理性を指摘できる。人々は直接的、日常的な接触がある共同体において自分はその共同体の一員というアイデンティティを自然に持つが、非直接的、非日常的な関係性の中でもアイデンティティを有することがあり、アンダーソンはこれを「想像の共同体」という概念で説明した¹⁹。たとえば日本人であるというアイデンティティを持つ東京の人は、北海道の稚内で地元の家族5人が交

通事故で死亡したというニュースに接して、行ったこともない地の、会ったこともない人に対して、ある種の共感を抱きうる。家族や友人の死なら衝撃は当然だが、そうではない人の死にも一定の感懐を持つのは、同じ日本人という意識を共有しているからと、説明されうる。こうした連帯の意識は、人々の想像の中に日本人同士という共同体意識を持つからであり、その意識は外部から形成されたとするのが、民族・アイデンティティ問題における構築主義、道具主義の考え方である。近代産業国家の生成、発展の中で政府は国家の経済発展や安全保障のため均質で忠実な国民を形成しようとし、一律のナショナルアイデンティティを陰に陽に国民に植え付けてきたのであるから、そうした外部から操作され強制されたナショナルアイデンティティ—たとえば自分は日本人であるという意識—をア prioriに主張の前提として日本人・外国人に分ける発想は、近代国家主義の弊害に無自覚という点で大きな懸念が向けられるのである。また、そもそもナショナルアイデンティティの根拠となる国境線にしても、暴力と詐術によって確定されてきた歴史を鑑みれば、それに依拠して〇〇人、××人と概念化する発想には根源的に不合理性がある。

逆に考えれば、直接的、日常的な共同体である親族のような場合において、親族とそれ以外とを区別する発想は合理性があろう。つまり、なぜ「自分の家族を助けず、あかの他人を助けるのか」という問いかけはもつともであり、そこには親族と非親族という血縁をを基準にした自立的、固定的な要素があるからである。

6. 国際協力ボランティアに問う—その3：「なぜ命を捨ててまでボランティア活動をするのか」

国際協力の支援活動は、その対象地・対象テーマに関して大きく二分でき、人間の安全保障の概念に沿えば、それは一つは「欠乏からの自由」と、もう一つは「恐怖からの自由」である。欠乏からの自由は貧困に由来する問題の解決をいい、恐怖からの自由は紛争に由来する問題の解決を目指す。したがって国際協力の活動においては紛争地においてその諸問題の支援にあたるという活動は多々あるのだが、そうした紛争地の「危ない」活動の場合、「なぜ命を捨ててまでボランティア活動をするのか」という問いが提起される。

2008年8月、アフガニスタンで農業支援の活動にとりくんでいた、NGO「ペシャワール会」の若いメン

¹⁹ Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso Books, 1991. ベネディクト・アンダーソン (白石隆、白石さや訳) 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』リプロポート、1987年。

バーが地元の武装勢力に殺害される事件が起きた。2004年4月にイラクで日本人3人の若者が拉致された事件では、当事者に対して批判の声が大きかったが、同じような条件のこのアフガンのケースでは逆に、賞賛の声が大きかった。この対照的な相違の分析は別稿に譲るが、一つの要因はイラクの場合は拉致された当事者が生存していた一方、アフガンの場合は当事者は即座に殺害されたという点である。死者を批判しにくい心情もあり、政府、メディア、世論の反応は追悼と賞賛のトーンが前面に出たのだが、批判とまでいなくても、底流に存在したもう一つの反応は「なぜ命を捨ててまで」という疑問であったろう。

この問いに対する返答は、その誤解を説明する形で成立する。つまり「命を捨てているのではない。結果的に命を落としただけ」と説明できる。ボランティア活動を崇高な自己犠牲の精神とみる立場では、命を捨てて他者を救うのはその究極の形としてありうるだろうが、ボランティア活動の動機には先述したように現実的な利己的な心理も混在するのであり、その意味で自己の生命の確保は絶対譲れない利己的な要素である。つまり、ボランティアは命を捨てているのではないから、そこを誤解している「なぜ命を捨ててまで」という問いは、そもそも事実誤認なのである。当然、日本とイラク・アフガンでは治安状況は違うから一定のセキュリティ・マネジメントの安全対策が必要ではあるが²⁰、そうした対応があった上であれば、日本でも起きえる不慮の不幸な事故死と同等の性質なのであり、敢えて命を捨てているわけではないのである。

7. おわりに

この小論では、ボランティア活動における意味と有用性について、その定義や動機、機能という観点から若干の考察をした。ボランティア活動に対するイメージや受け止め方は地域や時代によって違いがあるが、おおよそ共通して理解される特性は、自発性、無償性、公益性、利他性、連帯性などの要素である。ただいずれの要素もその概念には曖昧な部分を包含している。動機についてみれば、それは利他的、他者志向的な動機と、利己的、自己志向的な動機に大別でき、実態としては両者が混合する形でボランティアの行動を支

えていると理解できた。個別の機能としては6～7種の分類が可能であった。

その上で、国際協力の分野におけるボランティア活動に対してしばしば問われる批判的な問いかけに注目し、その反論としての論拠を提起した。「国際協力のボランティア活動は偽善でないのか」という点においては、動機に利己性と利他性の両者が混在している以上、この種の偽善論に対する返答には是認も否認も両面可能である。「困っている日本人も多いのに、なぜ外国人を助けるのか」という点においては、「問題のすり替え」対応、自己矛盾論、巡り合わせ論、想像の共同体論などによる合理的な反論が可能であった。また、「なぜ命を捨ててまで、国際協力のボランティア活動をするのか」の問いについては、事実誤認としての論拠で説明できる問題であった。

ボランティア活動にはその機能に応じて様々な効用が存在するのであり、利他的であっても利己的であっても広く社会全般において有意義であるといえる。その効用は国際協力であろうが、それ以外の分野であろうが質的な差はないと思われる。

金子はボランティア活動自体の持つ楽しさや魅力、その報酬を説いたうえで、ボランティア活動は「社会の閉塞状況を打破するためのひとつの『窓』になる」と、その効用を重視する²¹。東日本大震災を機にいつそうのボランティア活動の拡大と深化があるとすれば、震災は中・長期的な日本社会の発展にとって、ある意味「災い転じて福となる」のかもしれない。

²⁰ 拙稿「平和構築支援におけるセキュリティ・マネジメント—援助従事者の安全をどう高めるか—」『大阪女学院短期大学紀要』35号、2005年、17～35頁。

²¹ 金子郁容『ボランティア—もうひとつの情報社会—』岩波書店、1992年、69～70頁。